

Title	露西亞史講話(齋藤清太郎著, 明治書院發行)
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.161(325)- 161(325)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

撰述、鄧天一閣の修葺に就て述べてゐるが、一讀の價値は充分ある。張峯は文瀾閣四庫全書史稿と題し、約百五十葉に亘つて閣史を詳述してゐる。四庫全書研究家の看過することの出来ぬ文獻である。孫正容は南宋臨安都市生活考(上)と題し、位置、人口、食貨、市政方面より臨安の都市生活を述べてゐるが、卷を逐うて街坊、教育、娛樂、風俗、及び宮廷等に言及する意向らしい。其他柳詒徴の劬堂讀書錄、夏定域の吳越錢氏の文化、楊敏曾の黃梨洲先生遺書書後、李笠の校勘學の旨趣、黃紹箕遺稿散氏盤銘補釋、陶存煦遺稿姚海槎先生年譜等何れも一讀の價値がある。卷末文苑には今はなき章太炎の孫仲容先生年譜序及び孫太僕年譜序の一文があり、又詩人として著明な陳散原は馮君木墓誌銘の一文を載せてゐる。第二卷の内容紹介は省略するが、第一卷同様、目錄學、校勘學、書誌學等に關する記事が多い。尙本書が郷賢未刊遺稿を公にすることを一の目的としてゐることは寔に有意義なことといはなければならぬ。(宮島貞亮)

露西亞史講話

齊藤清太郎著
明治書院發行

世界大戰以後ロシヤの研究が盛になり、我國に於ても多くのロシヤに關する書が刊行せられたのであつた。然しロシヤの通史に至つては殆んど見るべきものはなく、日本語にてロシヤ史を知らんとするには齋藤先生の大正十年に發行せられし露西亞史講話によるか、或は岡田宗司氏の譯せるポクロフスキイのロシヤ史等によるより他なかつたのである。共にあまりにも古い研究であり、

大なる變化のあつたロシヤのその後の歴史について知ることを得なかつたのである。この時にあたり齋藤先生が大正十年に發行せられし舊著を改訂せられ、帝大慶應等にて講義せられしノート等により新に露西亞史講話を發刊せられしは大に喜ばしい次第である。

本書は建國の初より説かれ、ペートル大帝よりニコライ二世にいたるロシヤ帝政華かなりし時代に就いて本書の大半を費されて詳しく述べられ、最後にソヴェエトロシヤのスターリンの獨裁政治まで説き及ばされてゐる。本書はロシヤの政治的變遷に重きを置かれ、ロシヤ政治史の觀があるが、西洋史特に近世史に興味を有する者、ロシヤに關心を持つ者にとつて必讀の書である。

(田中判三)

The French Revolution and Napoleon,
by Leo Gershoy (New York, 1934)

フランス革命及びナポレオンに關する大小の著述は年々數多く出版されてゐるが、公平なる立場からすべての問題を論じ、一冊を以て大抵の參照には事を缺かない、といふ様なものを探し出すとなると中々困難である。本書はその序文に、この時代に關する新研究は絶えず續々と現はれるが故に、その悉くを採入れるに非ざれば新著は價値無きものとなるべきも、特殊な研究に一々没頭する餘暇なき讀者、研究者のため『新知識を及ぶ限り明瞭に、系統的に述べる必要』から書かれた、とあるによつて知られる如く、